各地で大規模な土砂崩れが発生、農業用水路をふさぎ水田に水が送れなくなるなどの被害も生じた（黒坂発電所付近）

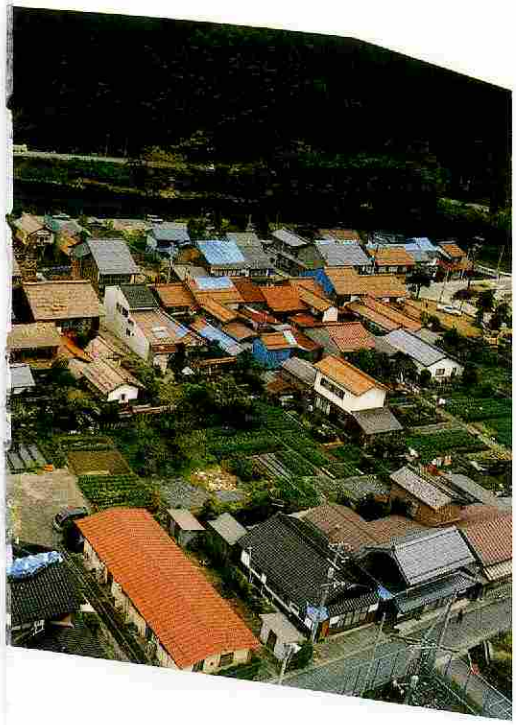
大規模な山林災害は久住地区への道を閉ざした（県道菅沢日野線）

雨が降るたびに土砂崩れの心配も（大規模林道日野金城線）

トンネル内部も亀裂が生じる（大規模林道日野金城線）

震災後の黒坂のまち（写真：岡山県・堀家純一氏、平成12年10月撮影）

ちょうど１年前に空撮された黒坂のまち（写真：新潟県・ゼネラルエアーシステム㈱、平成11年10月撮影）



震災後の下黒坂地区（写真：岡山県・堀家純一氏、平成12年10月撮影）

震災1年後の黒坂のまち（平成13年9月撮影）

地震発生直後（午後1時35分）に日野町災害対策本部を設置。火の元点検や自主避難の呼びかけ、住民の安否確認、避難所の確保など初動体制に取り組む（日野町庁舎前）

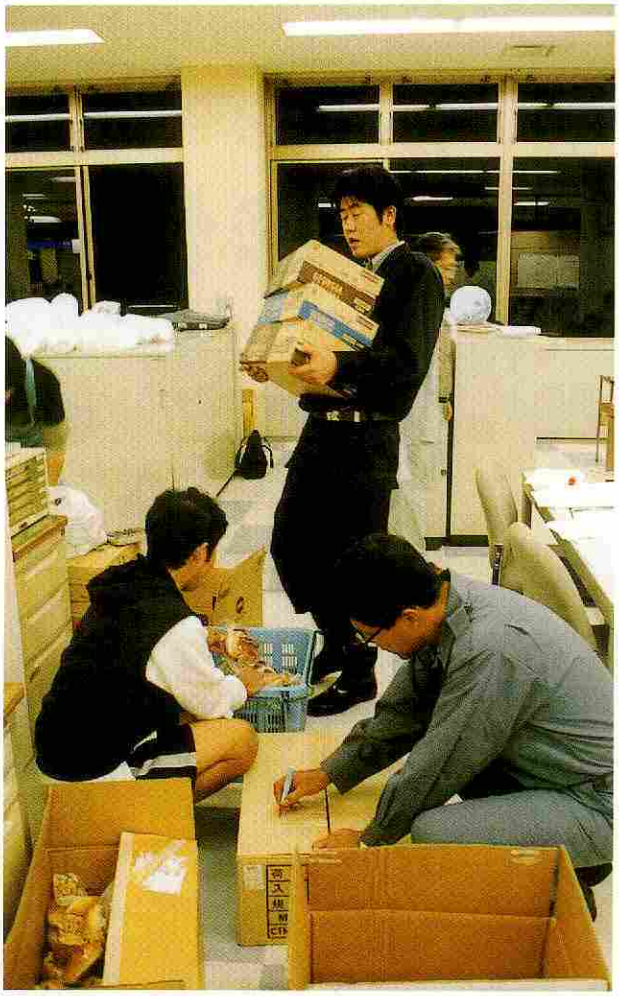
被害確認や住民支援に消防、警察、自衛隊などが協力して出動（日野町庁舎）

地震直後（午後1時31分ごろ）の役場庁舎内、まだ揺れている

ブルーシートを自治会を通じて配布

陸上自衛隊による給水や炊き出し支援（日野町庁舎駐車場）

水道施設が被災したため、復旧するまで町内７か所で順次給水車による給水活動を行う（下榎地区）



避難所等への食糧を確保

翌朝、生田町長が防災無線を通じて町民に激励と状況報告

報道発表も随時開催、全国から報道関係者がつめかける

老朽化が進み、新築移転を進めていた矢先の日野病院

急きょ移転が早まり、準備に追われる

移転まで仮の施設で診療を再開、待合所は野外テントで

屋外避難した入所者（老人保健施設・おしどり荘）

避難先で患者の容体を気遣う、翌日には他の病院に搬送
（写真：山陰中央新報社）

日野病院は患者の安全確保のため、64人を根雨社会体育館に一時避難（写真：共同通信社）

住民どうしの助け合い活動を展開（下榎2区自治会）

震災後10月8日から町文化センター・ホワイエに災害ボランティアセンターを設置

避難所は、町内で12か所開設、自主避難のほか2か所には避難勧告も
（黒坂小学校体育館）

自宅の安全が確保されるまで避難生活が続けられた
（菅福小学校体育館）

自分たちの地域は自分たちで守る、さっそく炊き出しも
（黒坂地区コミュニティ推進協議会）

避難者のため、自衛隊が町内3か所に仮設風呂を設営
（日野中学校校庭）

県内外から大勢のボランティアがかけつけ、救援活動を展開（下榎地区）

ガレキの撤去や屋根のブルーシート張りなど、ボランティア活動は高齢化の進んだまちにとって復興の大きな力となった（根雨地区）

写真／下関の中原正行さんと、孫の早紀ちゃん

今こそ愛と元気なまちづくり

10月6日に発生した鳥取県西部地震災害から立ち直るため、今こそ“愛と元気なまちづくり”を合い言葉に、町民みんなで力を合わせて、復興に向けてがんばりましょう。

鳥取県日野町

■発行 日野町役場　〒689-4503　鳥取県日野郡日野町根雨101　☎ 0859-72-0331（平成12年11月6日）

11月10日、震災から1か月がたち、復興の励みにしてもらおうと『今こそ愛と元気なまちづくり』ポスターを全戸配布

一日も早い復興をめざして、住宅の新築、修繕が急ピッチで進められている（黒坂地内）

町は住宅復興補助金として住宅の新築に300万円、修繕に150万円、また石垣や擁壁の補修、井戸の改修にも補助している

応急仮設住宅には被災して自宅に住むことができなくなった人などが入居

黒坂小学校校庭など町内４か所に応急仮設住宅28戸が建設された

10月7日に滝山公園の空き地に災害廃棄物の仮置場を設置、ガレキの回収等復興作業を進める

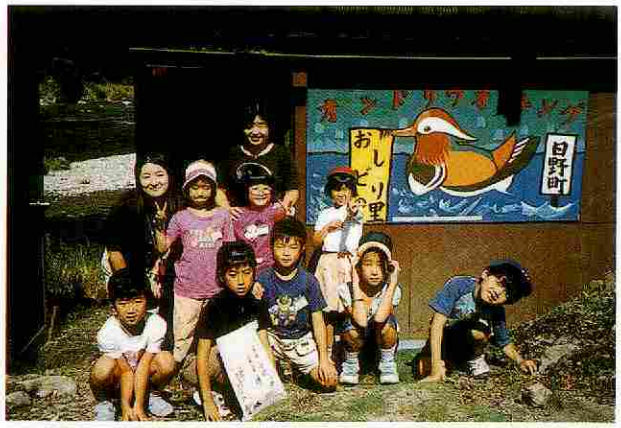
家屋の解体も公費で行った

阪神淡路大震災を経験した兵庫県北淡町職員から
家屋調査の指導を受ける

建物応急危険度判定、家屋被害調査を全戸実施

住宅復興補助金の確認申請には1,696件の届け出があった

日野病院は、旧病院が被災したため予定より2か月早めて11月1日に開院（野田地内に新築移転）、中山間地域の医療、福祉、保健の中核として期待される



町のシンボルオシドリの飛来シーズンに備え観察小屋を改築

水路被害で稲が作れないため、下榎地区では大豆を集団転作、消毒作業もミニヘリを使って

地域の活性化をめざし、根雨のまちにチャレンジショップ2店舗がオープン（12月8日）

国土庁蓮実総括政務次官ら政府調査団が視察（10月7日）

谷農林水産大臣視察（10月16日）

自治省消防庁鈴木長官視察（10月18日）

自治省嶋津財政局長視察（10月20日）

片山善博県知事も住民から直接被害状況等を聞き、激励（10月20日）

建設省松野政務次官視察（10月27日）

わたしの震災体験記

水道施設が被災したため、給水車から給水を受ける住民（下榎地区）

震災を体験された町民、ボランティアほか関係の方々のなかから、記録編集部会で選出した方に体験談をお寄せいただきました。時間的な経過とさまざまな状況の推移のなかで、①地震直後の体験②立ち上がりのきざしのなかでの思い③震災からの復興をめざして、という３つの視点で寄稿いただいたものです。

天災は忘れないうちにやってきた（前黒坂１区自治会長　稲田巧）

ポカポカ陽気の小春日和であった。根雨に向かう車の中で、突然ゴゴーと凄まじい地響きと振動。国道が片道陥没し、塔の峰から砂煙が上がった。樹木が大きく揺れ倒れた。「たいへんだ、地震だ。」突然にやってきた未曾有の大地震が日野町を襲った。家に連絡がとれない。帰路の途中、岩田地区の上で山崩れ、通行不能。奥日野広域農道を別所から滝山公園内に向かう。落石を取り除きながら15時頃帰宅。家のガラス戸は外れ、壁が落ち、家具は倒れ食器類は散乱し、足の踏み場もない状態。妻は余震におびえながら、一人茫然と立ちすくんでいた。

16時30分頃、黒坂支所から自治会長集合の連絡があり出向いたが、集まったのはほんの数人。日野町としての方針がまだ出ていないので、自治会として自主的に対応してほしいということだった。黒坂全体としての対応を協議し、それに基づいて各自治会で対応することにして別れた。区に帰り、班長を招集し下記事項を決めて各家庭への周知を依頼する。

①各班ごとに各家庭の居場所･避難場を連絡すること。

②避難所の夜具は持参すること。

③夕食は各家で準備し、ライフラインを確認する。（水道破損4件、電話0件、電気の故障2件）

④黒坂２区集会所を当分の間、常時開放して区民が自由に利用できる。

23時頃、区内の巡視。全家屋玄関の戸が破損したため施錠もできていない。警察署に保安の要請をしたが、署員が出払っているので対応できないとのことなので、自治会で自衛することになった。以上が地震発生から24時までのドキュメントである。

平成7年1月の『阪神・淡路大震災』の教訓から、「危機管理」が叫ばれて５年9か月が経った。「天災は忘れた頃にやってくる」という諺があるが、まさに「天災は忘れないうちにやってきた」である。今回は、震度の割にはいろいろな有利な要素が加わって救われた面があるが、今回の地震に遭遇したこの貴重な教訓を、ただラッキーだったで終わりにしてはならない。町長をはじめ行政の管理者は、住民の安全と健康を守るために、最悪のシナリオを想定して、初期対応･復興手順等をシュミレートし、訓練を繰り返して備えることが「危機管理能力の向上」につながると確信する。

恐怖の震災体験（黒坂　前田操）

昨日と同じ時刻に、米子の某医院に家内を乗せて出かける。最近体調が悪く、今日で５日目の点滴だ。いくぶん良くなってきたようだ。いつもは１１時過ぎには終わるのだが、今日はまだ出てこない。ようやく正午過ぎになって出てきた。「きょうは点滴が２時間くらいかかったから」という。帰りに食品を少々買い、宇代上の広場まで帰り、淡日のあたる所で駐車。車内で昼食を取り終えた。時計は午後１時半になっていた。さて帰るかとキーを回したとたんに車が激しく上下する。おかしいなと思い見ると、電柱や電線が大きく揺れている。大きな岩がもんどりうって落ち、路面にあたり大きな音を立てている。車をバックしようと後方を見ると、大きな岩が道をふさいでいた。「もうだめだ、岩が当たる」、頭のなかが真っ白になった。時間にして数秒だったろうか、われにかえってあたりを見ると、落石は終わっていた。車はフロント部分がつぶれていて、助手席側のドアもない。まわりには、直径１メートルくらいの岩がごろごろしている。妻は私の問いに「大丈夫」と返事をした。「でもどこから出るの」と聞く。私は「フロントガラスがないから前から出られる」と出ようとするが、二人とも左足がフロント部分に押さえつけられていて抜け出られない。近くの工場から人が出ていたので、妻が「助

周囲の山が地震に揺すられて、道路には大きな岩が落ちてきた（前田さんの被災した現場：溝口町内、県道）

けてぇー」と大声で助けを頼んだ。すぐ5、6人が来てくれた。ひとりが妻の足を押さえつけている物に手をかけたが、びくともしないので、他の人に金棒を持ってくるように言った。それを取りに帰った人が戻ってくる間にも余震があり不安だった。金棒でコデるとすぐに足は抜け、負ぶさって工場前まで避難する。私の足もすぐには出ず、二人がかりでようやく抜くことができた。負ぶさって妻のところまで運んでもらい、椅子に座ることができた。崩れた山が正面に見え、山肌に赤土が出ていた。崩れ落ちた岩や土砂が、まるで私の車を避けるように途中で左右に分かれていた。「ああ、助かったんだ」妻の顔を見ると涙が出そうであった。

震災で思ったこと （本郷　松本佐智子）

平成12年10月6日は、私にとって一生忘れられない一日となりました。

地震が起きたとき、私は主人の運転する車の中にいましたが、なにか車がバックしていくような気分になりました。近くの商店に行ってみると、道路には亀裂が入り、棚に置いてあるものが落ちていました。家に帰ろうにも、道路には大きな岩が落ちていて、もうすこしで自宅なのに結局帰ることができず、主人は私たちを親戚に預けて、仕事場に向かいました。私たちが帰宅したのは随分暗くなってからでしたが、あまりにも景色が違っていたので驚きました。ひとりで家にいたおじいちゃんが少しけがをしていましたが、元気だったので安心しました。家の中は足の踏み場もない状態で、子どもたちは泣き出してしまいました。私は何をどうすればよいのかわかりませんでした。この年は、主人が自治会長をしていましたので、役場からひっきりなしに連絡があり、とてもたいへんでした。発生直後から主人は帰ってくることができませんでしたので、私で大丈夫だろうか、地区の人たちにご迷惑をかけてしまうのではないだろかと不安でしたが、ご近所の皆さんに助けていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

もうすぐ一年になろうとしていますが、いまでも、「地震のときはたいへんだったね、お世話になりました。」と言ってくださる方もおられ、恥ずかしくもあり、うれしくもあり、複雑な気持ちです。

私は日野町にきて数年しか経ちませんが、普段から地域の密接な係わり合いがとても大事だと思います。また、あのような非常時だからこそ、よりいっそうの連帯感が必要なのだと痛感しました。

ボランティア活動を通して　（日野中学校３年生　上田紀穂）

忘れもしない１年前、鳥取県西部を中心として震度6強の地震が起きました。日野町は大きな被害を受けました。わたしは震災から３日間、家族とともに開発センターで不安な避難生活を送りました。そこには、地震の不安におびえる近所の人たちがたくさん詰めかけていました。少しずつ余震もおさまってきたので、友達と遊んでいたところ、保育所の先生から、「ボランティアをしてみない？」と声をかけられました。「ボランティア？わたしが？‥」と思いましたが、時間はあるし、ボランティア活動を知るよい機会だと思って、やってみることに決めました。仲よしの小林紀代花さんも一緒です。10月10日朝、保育所の先生の指示を受け、開発センター2階に食料を運ぶのを手伝いました。それが終わり、ほかに自分たちにできることがないかと考えました。中学校の体育館に避難している方のお世話できることがあるかもしれないと考え、行ってみることにしました。職員室で、「わたしたちにできることはないですか？」と聞くと、「役場に大切な書類を持って行ってくれる？」と頼まれました。 途中の道では、ふだん見慣れている日野川の流れも、気のせいか怒っているようで、気が弱くなっている人を飲み込んでしまいそうな気がしました。用事を済ませ中学校に帰りました。友達と相談して、2階のトイレと体育館を掃除することにしました。体育館トイレは地下で配水管がグチャグチャになり、汚物がきれいに流れず詰まっていました。正直言っていやでした。悪臭や散らかったティッシュペーパー、片付けるのがたいへんでした。でも、掃除していると、避難している人に「ありがとう」と温かい声をかけてもらい、人に喜んでもらえるのって気持ちがいいなーと思いました。翌日からは、珞川さんも加わって、昨日と同じようにトイレ掃除や廊下掃除を本当に一生懸命しました。ボランティアは疲れることも多いけれど、しているうちに楽しくなりいい気持ちになりました。ふだんの生活では、学校の掃除なんて面倒くさくて怠けてしまうこともあります。そんなわたしが、今、ボランティアで頑張って掃除をしていることを思うと、なんだか変な感じがします。人のために何かをすることでこんなに自分が変わるもんかなと思いました。

掃除を終えて職員室に行くと、河原中学校や日野中のテニス部と交流のある県外の中学からの寄せ書きや義援金が届いていました。「たいへんだと思うけどがんばって！」「くじけるな！」

わたしはうれしくて、うれしくて一つひとつ激励のことばをかみしめながら読みました。たくさんの元気をもらった気がしています。

避難している方が寝泊りしておられる体育館の雑巾がけをしました。体育館は広くてとてもたいへんでした。でも、県外のボランティアの人たちが手伝ってくれました。おばあさんたちが、「いつもありがとうね」と言ってくださいました。わたしも笑顔で「はい」と大きな声で答えました。その後も、まるで何かがわたしの背中を押しているように、夢中になってやりました。

わたしは、地震でつらい思いもしたけど、ボランティアをするという機会に出会い、多くの人とふれあい、とてもすばらしい体験ができました。

これからは、わたしにできることがあれば、今回のことを生かしてすすんで何かをしたい、いえ、しなければと思っています。

家屋が被災し、高齢世帯や一人暮らしは大変

高齢者の安否確認を　（民生児童委員　田渕武夫　三谷）

当日は、全国介護保険推進サミットに参加していました。会場である米子コンベンションセンターで午後のディスカッションが始まった矢先でした。ぐらぐらと烈しく揺れて、会場内から「地震だ」「地震だ」という声があちらこちらから起きました。私たちはとっさに安全な所に避難しなければと、日野町の参加者全員で屋外に避難しました。その後も余震が続き、なす術もなく様子を見る外ありませんでした。しばらくすると境港方面の被害が甚大だとのうわさが流れて来ました。その後も次々に余震がやってきましたが、日野町は地震に強いとの先入観があり、まだ他人事のような気がしていました。時間の経過と共に我が家が心配になってきました。情報は皆無で電話も不通で連絡の方法もないまま時間は経過し、迎えの車は午後４時ごろに到着、ようやく帰路につきました。その途中、墓地に寄り様子を見ましたが、墓石は全部倒壊して散々たる状態でした。家族は幸い全員無事でした。担当地区の独居高齢者等の安否を早速確認しましたが、全員無事とのこと。家屋の倒壊はなし。しかし、全戸で屋根の棟や壁等の一部を破損していました。

日野民協の谷本会長からの指示で会長宅に集合し、ボランティアの受け入れ体制や独居を始めとする高齢者世帯への対応、委員会のこれからの役割等を確認しました。翌日からボランティアの方々のお世話で屋根のシート張りを実施し、屋根の雨漏りの心配はなくなりました。最初の通達では住居だけとのことでしたが、その後作業が進み、住居以外もシート張りをしていただきました。その後、私も４日間ボランティア活動に従事致しました。対策本部からは次々と通知やお知らせ等が配布されました。住宅復興事業の確認申請など独居高齢者には難しい点もあり、写真や位置図等の添付書類作成のお手伝いを致しました。

盲導犬の受け入れに感謝 （根雨　田渕ひとみ）

今回の震災を振り返えると、避難所の中に盲導犬を受け入れていただいたこととボランティアの援助がとてもうれしかったです。他の被災地では、盲導犬が避難所の入り口までしか入れてもらえなかったという話も聞きましたが、日野町では快く受け入れていただきました。また、ボランティアの方には買い物や家の片づけ、そして予定が早まった新病院の開院に向けて、通勤の練習にも付き添っていただきました。町民の方、ボランティアの方、そして行政の方々に感謝申しあげます。

１０月６日の午後は休暇で友人と町内のレストランで食事して、ちょうど自宅へ帰ろうとしたときでした。最初は軽震かなと思いましたが、次にぐらぐらっと大きく揺れ、店内のガラスや蛍光灯、食器が割れる音が響きわたりとても怖かったです。店の外に出ると「スーパーの看板が落ちている。」「自動販売機が駐車場に倒れているぞ。」というまわりの人たちの声が聞こえ、とても不安になりました。

その日の朝、なぜかキティ(愛犬)はぐったりして元気がなく、フードは食べないし、水も飲みません。午前中の仕事が終わって帰宅すると、キティは家の中をぐるぐる、そわそわと歩き回っていました。仕方なく、昼は家に残して出かけました。前の日までは普通だったのに、その日はいつもと違って変でした。キティは、その後も余震におびえ、丸くなることが多くなりました。２７kgあった体重は、一時期２０kgまで落ち込みました。キティのリズムが戻ってきたのは春先の３月ごろからだったと思います。

今回の震災は、昼間で天気がよかったのですが、これが夜中や冬だったらどうなっていたのだろうと思います。震災直後は避難先や連絡先がわからず、とても不安でした。そういう意味で、避難訓練への参加や日ごろから災害時の対応を自分なりに考えておくことが必要だと思いました。

こわかったじしん （根雨小3年生　砂原基）

10月6日1時半に大じしんがおこりました。そのとき、ぼくは教室でほうきをつかってそうじをしていました。きゅうにゆれたので、「じしんだ」と言いました。つくえの下に入りました。先生が、「出ていいです」と言われてからぼくが一番にひなんしました。
ひなんしてからいもうとのくみこのことがしんぱいになって、ないてしまいました。いもうとはまだ1さいにもなっていないからです。おねえちゃんもないていました。そのとき、5年生のせたとおるくんが、「しんこきゅうすると、気がらくになるよ。」と言ってくれました。そのとおりしんこきゅうすると、気がらくになりました。

校ていからどしゃくずれが見えました。「ゴゴードドドーン」と、すごくでっかい音でした。そうしたら先生がかぞくの人に電話をしてくれました。「ああ、お母さんが生きていてよかった。」くみこも生きていてよかった。もう、じしんはおきてほしくないです。みんながぶじでほんとうによかった。